

第1問 次の例文の空欄に当てはまる言葉を選択肢から一つ選んでその記号を書き、その言葉の読みを記述しなさい。

例文

- (1) 故郷の訪問で旧友と [ ] して食事に行った。
- (2) 考え方の違いが人間関係に [ ] を生む。
- (3) 集った若者たちの活気が [ ] する。
- (4) 先生は [ ] な人格で尊敬を集めた。
- (5) 安全保障上の重大な問題が [ ] する。
- (6) 思想家が民衆を [ ] する。
- (7) 両者は [ ] したまま一步も譲らなかった。
- (8) 報告書で事実を [ ] した点が発覚する。
- (9) 海洋プラスチック問題を環境問題全般に [ ] して述べる。
- (10) 医療従事者としての [ ] をもって職務に励む。

選択肢

- (ア) 啓蒙 (イ) 横溢 (ウ) 範疇 (エ) 邂逅 (オ) 矜持 (カ) 平衡 (キ) 杜撰 (ク) 所与  
 (ケ) 瑕疵 (コ) 歪曲 (サ) 蓋然 (シ) 扞拭 (ス) 軋轢 (セ) 対峙 (ソ) 高邁 (タ) 整然  
 (チ) 慧眼 (ツ) 敷衍 (テ) 背反 (ト) 露呈

## 第2問 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

私が先生に大きな影響を受けたのは、中学校です。国語の先生が担任の先生ということもあり、非常に身近で良い話をする先生で、その先生が一番良かったのは、いばらないということでした。その先生は、戦時中に大学生だったので、「自分は大学生の時にはあまり勉強してへんのや。大してよく知らんことが多い。だから君らから学ぶことが多い」という風に「けんそん」しておっしゃったのですね。それが非常に印象的で、一緒に物事を先生と学んでいく気分というか、そういう雰囲気がつつとありました。私たちのレベルに降りながら、一緒に上っていくという姿勢が私にとって印象深く、この先生とだったら一緒にやれるという気持ちが持てたのです。私にとっての一番の気持ちの支えでした。以下省略しますが、他にも文学全集の読破を進めてくださった図書館の先生や、通信教育で教員免許を取られた農業の先生など、今でも印象深く覚えている先生がおられました。

自分はこういうことを一番やりたいと思っているけれども、いろいろな条件でそれをあきらめ、一番を差し引いて二番のことをやってきたということ。「引き算の人生」と呼んでいます。例えば、文系・理系という区別は今でもあまり好きじゃないのですが、高校に入るころまでは、文系にしようか理系にしようか<sup>ii</sup>なやんでいました。私には四歳上の兄貴がいて、<sup>iii</sup>かけっこをしても相撲を取っても勉強をしても兄には負けました。小さい頃の四歳の差は大きく、簡単には勝てません。しかし、その兄が、大学受験の頃には数学と理科が不得手だったので、そこで、数学や理科をがんばれば、私は兄貴に勝てるというわけで、数学や理科を一所懸命やっただけです。中学三年生の頃で、数学や理科が好きでやりたかったわけではなく、ただ兄貴に勝ちたい一心で取り組んだ結果として理系の人生を歩んだというわけで、最初の「引き算」ですね。

その後、私は京大に入ったのですが、日本で唯一のノーベル賞受賞者ということで湯川秀樹に憧れました。だから、素粒子物理学をやりたいかかったのですが、やはり同じ憧れを持って素粒子物理学をやりたいという優れた連中が全国からやってきているわけです。これじゃあ競争しても負けるというわけで、当時はまだあまり<sup>iv</sup>きやつこうを浴びていなかった宇宙物理学・天体物理学・宇宙科学という分野を私は選びました。これも「引き算」です。

ですから、学生達には、「方向転換しても構わない、新たな道が自分に用意された道だと思ってしつかり頑張れば、何か見付かるよ」と言っています。長い人生ですからね、何がプラスになるか、何が結果的に流れに乗るか、逆に言うとなんかマイナスになるか、何が不利になるかわからない。そんなことを気にせず、結果的に選んだ分野で一生懸命やっておれば、何か方向が見付かるということですよ。むしろ、幅広い視点ということか、あまり早めに専門化してしまわないで、可能性を多く残す方がいいのかもしれない。勉強するということは、まさにそういう様々な可能性があるということを見出すということ、知ることではないでしょうか。そういうことが大事なのではないかと思えます。

国語というのは、まさに言葉を通じて世界を思い返すということだと思います。「言葉を通じて」ということは、むしろあらゆる科目に共通します。全科目が言葉を通じての学習・学問なのです。そのなかで、①国語がいろんな科目を言葉によつてつなぐ役割をしていると言えらるでしょう。

私たち現代の人間と同じ種のホモサピエンスが地上に現れたのは、約二十万年前です。この二十万年前から現代までに、人類は言葉を多様にし、豊かな表現を可能にしてきました。

日本はこんなに小さい国なのに、こんなに多様な方言があるということは非常に不思議ですね。おそらく、それは江戸時代の地方分権がつてつていさせたのではないでしょう。そういう政治とからんだ言語の歴史もあつたと思われ。現代のようにSNSとかLINEとかで非常に断片的な言葉が使われている時代というのは、旧来の言葉が破壊されていく時代ではないかと心配しています。ほんの断片的な言葉のやりとりだけで、哲学は語れるのか、文学を多様に彩れるのか、ということがすごく気に掛かるからです。日本という国には、言葉の豊かさがあり、色んな表現の仕方があります。それを子供達は小さい頃から学んでいくわけですね。これだけ多様な言葉を何ともなしに区別しながら、漢字、カタカナ、ひらがな混じり、時にはアルファベットも入った文章を作っていくことができるわけです。これはすごい能力で素晴らしいことであつて、それを失わせないということが必要ではないかと思えます。果たして、今後SNSによつて新たな能力が開発され、新たな言葉の世界を広げ、言葉の世界の豊かさみたいなものも見出<sup>みいだ</sup>していく、そんなことがあるのでしょうか？

人間の成長というのは、言葉の世界の拡大であるというふうに見えるのではないでしょうか。人間は二十万年という時間をかけて言葉を豊かにしてきました。現代の私たちは、幼い頃、高校あるいは大学など、育っていく時期に応じて人としての成長段階を辿りながら、時間をかけて進化するという道を歩んでいます。言い換えると、ホモサピエンス二十万年の言葉の拡大の歴史を、私たちは十年なり十五年なりの学習で追体験して言葉を豊かにしているとさえそうです。そういう風な見方ができるのではないかと思っています。

例えば、小学校に入ってから一年生から成長するに従い、会話の意味の深さなどを学んでいくのですが、同時に物の名前を覚え、その性質を覚える作業も並行しています。それから、少しずつ抽象性がある数量、空間、時間の表現を知っていきます。やがて中学になると、今度は悲しみとか喜びとか、そうした抽象概念が心の中で生まれます。あるいは、抽象的な感覚や倫理、愛とか神とか正義とか平等とか平和とか利己とかの概念です。さらには、利他的というようなより高度な倫理感の基本を成すような感情表現を経験するようになります。高校の段階になってくると、言葉を結び合わせることによる思想や哲学、そして諸学の理解という段階に進みます。様々な状況の中で色々な言葉を使いながら、その言葉で表せるものを具体的に、全然違うものであろう言葉と結び合わせて、共通のある種のまとまった考え方や主張を具体的に表現し把握していきます。こういうふうには、②年齢とともに二十万年の人類の言葉の歴史を追体験していくのです。

高校時代は言葉を使って哲学とか宗教とか歴史とか社会など、あらゆる学問の基本的概念を獲得する世代・段階であると言えるでしょうか。従って、より広い世界を認識できるように科目構成になっています。もう一つ大事なことは、言葉を使うことによって色々な学問の関連を知る時代でもあるということです。要するに各学問が独立して別個にあるのではなく、それらを結び合わせることで互いに関連しあっていることがわかってくるということです。それがわかってくるからこそ、それぞれの大事さみたいなものも理解できるようになるのです。それを通じて、今度は自分で感情とか論理、あるいは概念といったものを表現する術を獲得する、そういう段階であるのです。

ここで、国語が全科目の架け橋となるということ、つまり言葉を主体にした科目としての国語が、読み、書き、理解し、学習

し、表現し、主張し、納得し、という全科目に共通する技量の基礎になるのは必然です。それぞれの言葉を通じて、その中身を表現したり、主張したりするのでから。それを自己と他者の関係、つまり他の人との間でやりとりすることによって深めていくということこそが、生きる力ではないかというふうに思っています。

十八歳選挙権が得られることになりました。つまり、日本では十八歳で社会的に一人前として位置づけられ、社会に送り出されるわけです。そういうときに、スキルとしての言葉の使い方と共に、言葉の持っている意味付けや、色々なものをつないでいく機能があるのだということをしちんと体得していくことが重要です。そのために、高校時代は社会人として基本的に求められる言語技量をマスターする段階と言えるでしょう。その場合、スキルとしての技量の獲得のみならず人間としての相互理解のため、言葉のより深い把握が不可欠です。

子供達が基本的に学んでいる部分は本当に基礎の部分なのですが、それは実は営々たる人間の活動の中で見出されてきた文化遺産なのです。そういうものを、私は「基層力」と呼びたいですね。市民が持つ文化に対する基層の力の源泉でもあり、基盤的に持っている力のことです。その基礎的な力をいかに充実させていくかということなのです。それが受け継がれ、次の世代、そしてさらに次の世代へと受け継がれ、豊かになっていくのですから。

これは(注1)ゲーテの「ファウスト」にある言葉ですが、「気を付ける、悪魔は年を取っている。だから(注2)悪魔を凌駕するた

めには、おまえも年を取っていなければならない」という(注2)メフィストフェレスの台詞(注3)があります。

悪魔というのは、人類が直面する様々な迷信とか、権威、社会的憶説、習慣、偏見、世にはびこる様々な悪などの、人類史的な難問のことです。人類史的な難問というのは、簡単に一筋縄では解決できません。悪魔は様々な策を弄しており簡単に姿を表さず、容易に解決させない。まさに年を取って(注3)老獪(らうかい)なのです。それを私たちは凌駕していくことが求められています。そのための教育であり、学問なのです。凌駕するためには私達自身も年を取っていなければなりません。年を取るといのは、それらから自由であるということ、どのような事柄もいったん疑ってかかるということです。さらに、知性とか論理性とか合理性という知の作業を通じて、自分としてはどう考えるかの思考法を確立する必要があります。それが教育と言えるのではないで

しょうか。

このように難問があり、それは簡単に解決しないのだけれども、私たち自身がそれらから自由で、とらわれていない、ということが大事ですね。生徒たちが自由であるためには、先生、教師がまず最も自由であるということが必要であることは言うまでもありません。

池内了 著「科学と社会へ望むこと」有限会社而立書房、二〇二二年、一〇六ページ～一一三ページ、一部改、一部中略箇所あり

(注1) ゲーテ……(一七四九―一八三二) ドイツの詩人、小説家、劇作家。「ファウスト」は、ゲーテによる悲劇の戯曲。

(注2) メフィストフェレス……「ファウスト」に登場する悪魔。

(注3) 老獪……さまざまな経験を積んでいて、ずる賢いこと。

問一 傍線 i、v のひらがなを漢字で書きなさい。

問二 傍線部①「国語がいろんな科目を言葉によってつなぐ役割をしている」について、この理由を解説した次の文章において、空欄【ア】【イ】に入る語句を答えなさい。本文を抜き出すだけで済む場合は、そうしてよい。空欄【ア】【イ】はそれぞれ十文字以内で答えなさい。

国語とは【ア】科目であるため、そのほかの科目の学習・学問に【イ】にもなるから。

問三 傍線部②「年齢とともに二十万年の人類の言葉の歴史を追体験していく」について、この内容を説明した次の文章において、空欄【ア】【イ】に入る語句を答えなさい。本文を抜き出すだけで済む場合は、そうしてよい。空欄【ア】【イ】はそれぞれ十五文字以内で答えなさい。

私たちは人としての成長段階で人類が【ア】言葉をなぞるように学ぶことで、【イ】することや表現することができるようになるということ。

問四 傍線部③「悪魔を凌駕するためには、おまえも年を取っていなければならぬ」について、筆者はこの言葉によって、

どのようなことを伝えようとしているのか。それを解説した次の文章において、空欄【ア】【イ】【ウ】  
 【エ】に入る語句を答えなさい。本文を抜き出すだけで済む場合は、そうしてよい。空欄【ア】は十五文字以内、  
 空欄【イ】【ウ】【エ】はそれぞれ十文字以内で答えなさい。

人類が直面する【ア】ためには、教育を通して権威、社会的憶説、習慣、偏見などに対して【イ】ことと【ウ】こと、それらに対する自分としての【エ】ことが必要であるということ。

問五 筆者が本文中で述べている内容として、次の(ア)～(オ)のそれぞれの文が正しい場合には○、間違っている場合には×をつけなさい。

(ア) 日本は言葉や表現が豊かな国で多様な方言も抱えているため、SNSなどの断片的な言葉であっても今後は新たな言葉の世界を広げていく可能性がある。

(イ) 学問はそれぞれ独立して存在するものではなく、高校生の時期とは各学問の基本的概念だけでなくそれぞれの学問が関連しあっていることを知る時期でもある。

(ウ) 子供達が学んでいる内容は、人間が活動の中で見つけて次の世代へと受け継いできた基礎的な力であり、これが市民の文化の基層の力ともなっている。

(エ) 私たちは社会に出て言葉を深く把握し人間としての相互理解ができるように、社会に出る前の段階では言葉の使い方のスキルを身につけてさえいればよい。

(オ) あまり早めに専門を決めずに幅広い視点を持つことや、途中で方向を変えて結果的に選んだ分野で頑張ることが、私たちの人生にとってよい場合もある。

### 第3問 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「資本主義」論を解説したとき、十八世紀後半のイギリスから始まった産業資本主義とは、産業革命による労働生産性の上昇と農村の過剰人口による低賃金の維持という、二つの歴史的な要因がマクロ的に作り出した「差異」によって可能になった資本主義であると述べておきました。産業資本主義時代には、どの企業も、機械制工場さえ建設すれば、労働生産性と実質賃金率の「差異」に比例した利潤率が確保できたのです。したがって、個々の企業の立場からは、機械制工場が利潤の源泉になります。

ここで重要なことは、機械制工場とは、モノであることです。かつてライブドアの創業者である堀江貴文さんが「おカネで買えないモノはない」と言い放ちましたが、全く正しい。おカネさえあれば、モノである機械制工場は買うことができます。そして、農村に過剰人口が滞留している限り、機械制工場さえ建てれば利潤を得ることができるのです。

すなわち、産業資本主義時代とは、おカネさえあれば利潤が得られるという意味で、おカネが支配していた時代であったのです。会社システムにおいて、おカネの究極的な提供者は株主ですから、産業資本主義時代に、(注1) 法人名目説と親和性を持つ(注2) 株主権論が唯一正しい理論だと考えられていたのは、それなりの理由があったのです。

だが、今すべての先進資本主義国が、産業資本主義からポスト産業資本主義への大きな構造変化を経験しています。もはや農村の過剰人口は枯渇し、機械制工場を持つだけでは、利潤を生み出すことはできなくなってしまったのです。利潤は差異からしか生まれません。ポスト産業資本主義のもとでの企業は、他の企業より効率的な技術、他の企業より魅力的な製品、他の企業が参入していない市場、他の企業とは異なった経営組織、すなわち他との「差異」を意図して導入しなければならなくなつたのです。

ここに利潤の源泉に関して、大変革が起こります。なぜならば、人工智能がまだ完全には人間の能力に追いついていない現在、「ヒト」しか、もっと正確に言えば、ヒトの創造力しか「差異」を意図的に創り出すことはできないからです。利潤の源泉が、機械制工場から、ヒトの能力や知識に大きく移行しつつあるのです。

確かに堀江さんが言っていたように、「おカネで買えないモノはありません」。だが、幸か不幸か、ヒトはモノではありません。近代社会においては、「おカネはヒトを買えない」のです。もちろん、札束を切れれば、多くのヒトは喜んで働いてくれるでしょう。でも、ヒトはやはりモノではありません。

特に、札束だけではヒトの頭の中の「創造性」は支配できない。意思も感情もあるヒトにヤル気を与えるには、おカネでは買えない「何か」が必要なのです。それは、例えば、自由な時間・文化的な環境・共感できる目標・社会的尊敬といった「何か」です。いや、ヒトにとって最も価値があるものは、「おカネで買えない何か」であるという「逆説」が起こってきている。事実、今資本主義的に最も成功している会社の多くは、そのおカネで買えない何かを従業員に提供することによって、従業員の創造性を喚起してイノベーションを起こし、結果的に大きくおカネを儲けるという仕組みを組織として創り上げている会社であるのです。

ということとは、ポスト産業資本主義の時代とは、おカネが支配力を失っていく時代であるということです。それは、言うまでもなく、会社の中で究極的なおカネの提供者である株主の地位の相対的な低下をもたらすことになるはずです。

ここで反論があると思います。おカネが支配力を失っているなどとは、とんでもない。二十世紀後半から二十一世紀にかけてのグローバル化と金融革命によって、ますますおカネが強くなっている。グローバル化とは資本の国境を超えた移動の強まりだし、金融革命とは金融資本による実体経済支配の強まりなのではないか、と。

だが、外見と本質とを見誤ってはなりません。おカネが激しく動き回ったり、おカネが激しく売り買いされたりすることは、先進資本主義国の内部において、おカネが確実な投資先を失ったことの結果であるのです。

確かに、先進資本主義国は、すでにポスト産業資本主義に突入しています。農村に滞留していた過剰な人口が枯渇してしまっただからです。だが、世界経済全体を見れば、まだその大部分の地域の農村では過剰人口が滞留しており、低賃金労働の供給源となっっています。グローバル資本主義自体は、まだ産業資本主義の段階にあるのです。

ただし、先進資本主義国が産業資本主義であった時代においては、その国内において低賃金労働者が農村から都会の工場へと

職を求めて大移動をしていました。日本の高度成長期の「集団就職」がその典型です。これに対して、グローバル資本主義には国境が存在します。移民には厳しい規制があります。国境を越えて、発展途上国の低賃金労働者が先進資本主義の工場部門に移動するのは困難なのです。これに対して、おカネ（資本）の移動の方がはるかに自由です。

そこで、先進資本主義国において確実な投資先を失った資本が、低賃金労働を求めて発展途上国や新興工業国に産業資本主義的な投資を始めたのが、グローバル化なのです。労働が資本に向けて移動するのは逆に、資本の方が労働に向けて移動を始めたとはいえます。

特に一九八〇年代以降、世界銀行やIMFの強力な指導のもとに全世界的に資本移動が自由化され、グローバル化が加速されていったのです。この動きは、農村に過剰人口を抱えている地域がある限り、続いていきます。だが、それもいつか枯渇してしまうはず。事実、すでに、グローバル化の勢いが衰え始めている兆候が見えています。

さらに言えば、金融革命とは、産業資本主義からポスト産業資本主義への構造変化の一つの表れにすぎません。金融とは、意義通りにいえば、資金を融通することですが、もっと広い意味では、時間やリスクや空間の「差異」を交換することです。例えば、債券とは現在のおカネと将来のおカネの交換ですし、先物やオプションやスワップとは現在の価格変動リスクと将来の価格変動リスクの交換ですし、外国為替とは一つの国のおカネと別の国のおカネの交換にほかなりません。

もはや機械制工場が利潤の源泉でなくなり、「差異が利潤を生み出す」という利潤創出の基本原理を意識的に実践しなければならなくなった時代において、どのような形の「差異」でもよいから見つけ出し、その「差異」自体をきめ細かく商品化していくこと——それが「金融革命」なのです。

私は<sup>(注3)</sup> 『会社はこれからどうなるか』において、おカネが支配力を失っていくポスト産業資本主義の時代には、会社システムの中軸的な形態は、法人名目説<sup>(注4)</sup> 株主主権的会社から<sup>(注4)</sup> 法人実在説<sup>(注4)</sup> 組織自律的会社へと変化していく傾向がある。そう論じたのです。

では、それは、日本型の会社システムの復活を意味するのでしょうか。残念ながら、そうではありません。

なぜならば、日本型の会社システムとは、産業資本主義、特に後期産業資本主義に適應した会社システムであったからです。ここで、後期産業資本主義とは、十九世紀の後半から二十世紀にかけての重化学工業化以降の産業資本主義のことです。それは、大規模な機械制工場や大規模な流通ネットワークを必要とするとともに、その機械設備やネットワークを効率的に運営するための専門的なノウハウや高度の熟練も必要とする産業資本主義です。

戦後日本の人本主義的、労働者管理企業的、共同体的な会社システムは、この後期産業資本主義にあまりにも適應した会社システムを作り上げてしまっていたのです。それは確かに個々の従業員にノウハウや熟練の習得を促す仕組みを備えています。だが、そのノウハウも熟練も、基本的には、機械設備や流通ネットワークを効率的に運営するためのノウハウや熟練でしかありません。

もちろん、それらが全く意味を失うなどということはありません。特に、技術や市場が少しでも成熟してくると、まさにこのようなノウハウや熟練が大きな力を發揮していくことになるはずですが、そうはいつでも、それはやはり、ポスト産業資本主義的な企業にとって最も重要な差異性を創り出していくことのできる知識や能力とは、必ずしも一致していません。

それゆえ、『会社はこれからどうなるか』で私は、日本型会社システムの将来に関して、「変わらなくてもよい」が「変わらなければならない」という、一見すると矛盾するメッセージを送るようになりました。

変わらなくてもよい——なぜならば、株主主権論から距離を置いてきたその歴史は、経済学界や法学界における多数派意見とは逆に、ポスト産業資本主義という新たな時代と親和性を持っているからです。

変わらなければならない——なぜならば、ポスト産業資本主義における会社の命運は、もはや機械制工場の脇役としての能力や知識の育成と発展ではありません。会社の中で、従業員や技術者や経営者がみずから率先して差異性を生み出し続けていくことのできるような人的組織——そういう組織をいかに育成し発展させるかにかかっているからです。

岩井克人・前田裕之 著「経済学の宇宙」 日本経済新聞出版社、二〇一五年、三二八ページ〜三三三ページ、一部改、一部中略箇所あり

(注1) 法人名目説……法人は人間の集まりに対して与えられた単なる名前であるとする考え方。

(注2) 株主主権論……会社は株主が保有する株式の価値を高めて、収益を株主に還元することを第一の目的として運営するものだと  
という考え方。

(注3) 『会社はこれからどうなるか』……筆者の著書。

(注4) 法人実在説……法人はヒトと同様の社会的な実体であるという考え方。

問一 筆者によると、産業資本主義の時代を「おカネが支配していた時代」と言えるのはなぜか。80文字以上100文字以内で書きなさい。80文字以上の記述がなければ採点対象とならない。

問二 筆者は、日本型の会社システムはどのように変わるべきだと考えているか。産業資本主義の変遷にも触れながら、筆者の主張を、理由も含めて、380文字以上400文字以内で要約しなさい。380文字以上の記述がなければ採点対象とならない。